

「抽象」あなたはどの単語を見てどんなイメージを思い浮かべるだろうか。「抽象」絵画は19世紀末、あるいは20世紀初頭に現れた、具体的なモチーフを持たず幾何学や不定形の色面で構成された絵画である。(もしくは線画のみの場合もある)。それまでヨーロッパの美術界のメインストリームであった物語絵・風俗画・風景画・肖像画といった、対比的に言ると「具象」絵画のジャンルからは大きく逸脱した表現手法だ。代表的なアーティストはワシリー・カンディンスキー、パウル・クレー、カジミール・マレーヴィチ、ピエト・モンドリアンらである。誰もがいずれかの作品を見たことがあるであろうし、「美術って難しい、理解不能」という「美術わかんないアレルギー」発症の原因になりがちな御仁たちである。いったい彼らはキャンパスの上で何をしていたのか。抽象とはそもそも、あるモチーフの輪郭を取り除き本質だけを抽出するアプローチである。その対象の本質を何と見るか、対象のどの側面を取り出すのかは制作者本人の主體的な動きである。そこにだけ対象を受容し自らに取り込み、そうして出てきたものを視覚的に表現していく一連の流れが存在している。さて、このチラシで皆さんに広報している個展の主催者・谷本梢も数年にわたり同様のアプローチで作品を制作している。それは数字であったりだ

てんで わやわや

2022. 6. 19. Sun. - 7. 3. Sun.

菅原山崇禅寺

れかとの関わりでのメインテーマのする。音楽、それ曲—「クラシックジャンルが一連のとなっていて。二らのなかにある感表象する一つのトラスチック音楽をポクラスチック音楽が「クラシック」ジャンルでは、ヨーロッパ17世紀からの主に宮廷音楽るが、古くはグレゴーツを持つと言リスト教におけるするグレゴリオも神の世界を人

ように「抽象化」したものだと言える。宗教における世界の抽象化は仏教にも当てはまる。例えば「曼荼羅」は多層的な仏の世界を平面に「抽象化」したものであると言えるし、真言マントラはその世界ひいては宇宙の本質を一言に「抽象化」したものである。このキリスト教と仏教、この宗教から見ても「抽象」とは非常に思想的・論理的なアプローチだということが分かるだろう。クラシック音楽は神の世界=宇宙の本質を捉えようとする宗教的側面の流れを組んだストラクチャルな音楽であり、谷本は感覚的にその多数の思索の集合体である音楽構成を自らの「抽象」する対象としてふさわしいと認識したのだと考えられる。音の旋律をなぞるようにして引かれた無数の線は表面に露出しているものよりもずっと多くをその内部に内包している。近づいてみると厚く塗られた絵の具の層が垣間見えるはずだ。音楽を契機として引き出される感情と対話しているのである。音楽のシリーズに限らず、谷本は自身の外界の情報を受容し、それを自身の内部(記憶・情動・蓄積)とすり潰し、攪拌し、消化し、そうして出てきた一滴を支持体の土に幾筋も垂らしていくのである。この瞑想的な手法は音楽、宗教と同じように世界の・宇宙の本質をなんとか感覚化させようとする切実な試みのように見える。芸術とは自らの生きている世界の理屈を納得できる形で捉えたいという人間の営みの発露なのだ。・・・という夢を夢た。

あったり、今回「音楽」だったりも西洋音楽の古音楽」というシリーズの主題ここでは谷本は自情、心の動きを身ガーとしてク用いている。なだったのか。我々と呼ぶ音楽ジャロップで作曲さ19世紀ごろまでが演奏されていゴリイ聖歌にわれている。キ神の世界を表現聖歌は、そもそ間が理解できる